

翻訳

## 東遊六十四日随筆（下）

李 春 生 著  
李 瑳 瑳 訳

明けて四月一日

一夜続いた暴風雨は静まる気配をみせない。

思えば高島公とは名古屋駅でお会いして此の方、慌しさのあまり歓談の機会を得ていない。ひと月後には東京でお目にかかれるものと期待しつつ、井原君には度々連絡を取らせているところだが気に掛かる。

朝食後、ダビッドソン、井原両君と雨の中を貴族女学院へと向かう。

学院では執事の案内で見学を始める、幾棟もの校舎、充実した制度、全て洋式を採用し、専門科目別のクラス編成、才能に適した科目の選択、英語と漢文、ドイツ語とフランス語、数学と絵画、音楽と書道、更には刺繍裁縫など女子が習得して置くべき嗜みなど全てを網羅している。

当校には上流家庭の女子学生五百名あまりが在籍しており、教師は数十名、男女各半数で皆優れた人格者であると聞く。カリキュラムは西欧方式で、休憩室や球戯場、遊戯用具なども完備している。また心身の向上を図る一環として音楽のリズムに合わせて行進を行うなど人材育成の面での配慮も行き届いたものだ！

正午近くになると主人は余らの空腹を気遣ってか頻りと茶菓を勧める。帰り際には山水、花木などが生き生きと描かれた丹青画帖を贈呈された、これは上級学府に進学した当校女子生徒の優秀作品とのことだ。

宿に戻る。昼食を済ませ雨の中を車で牛込へと向かう、一晚孫らの顔を見ていない。迎え出た呂炳の話しでは先生の教育よろしきを得て皆里心も起こさずに元気とのことだ。

ここにきて余の帰台の念はつる一方である。呂炳には年長の孫の延齢に手渡して置かねばならぬ品々を纏める様申し付け、明日また塾に来ることにする。丁度伊沢修二学務部長と葉根林兄が台湾に戻られると聞き、不要になった荷物と家信を託し、家信には子供たちの入学状況を詳細に記し、末尾には日本には美しい風景が見尽くせぬほどあることも一筆書き添える。

帰心矢の如しである。比志島公が赴台されると聞きご一緒出来ないものかと井原君に書簡を託し台湾行きの出航日程などを打診してもらう。夜分、葉根林兄を「對山館」に訪ねるが不在、帰りながら中年男女の衆が小脇に風呂敷包みを抱え家路を急ぐ姿が目にと留まる、問うてみたところ彼らは若輩がゆえの浅知短才を克服せんと奮起して修業に通っているところだとの答えが返る。日本人は勤勉だ、すでに嫁いだ婦女までが尚も勉学に勤しんでいる。

宿にもどり食後日記をつける

明けて四月二日

朝食を済ませ葉根林兄に会いに再び車で「對山館」へ向かう。家信と荷物を託し互いに親しく語り合う。彼には帰台した際は友人諸君に余がご無沙汰していることを詫びてくれるよう頼む。すっかり話し込んでしまう。

昼食のあと孫たちの学習情況を見に車で牛込に向かう。広間で遊び廻っていた孫たちは余に気が付くや嬉々として挨拶に飛んで来た。丁度塾に居られた鳥居先生は子供達を着席させて授業の様子を見学させてくれる、子らはわれ先にと怖気づいた様子は些かも見受けられない。先生の教育方法も思いのほか軽妙なものである、傍らに居られる奥様が時折孫たちに手を差し伸べて下さる慈愛に満ちた光景に安堵しながら帰途につく。余は孫への纏綿として離れ難い心情が彼らの里心を掻き立て、勉学の妨げになるのではと恐れる。

宿では桑島君が余の帰りを待っていた。再会を喜び合うが彼の病状には心が痛む。暫くするとアメリカ人宣教師嘉君が訪ねて来る。丁度宿に居合わせたダビッドソン君も加わり日本の風俗習慣や学校教育などをめぐり談義を交わす。

話の中で嘉君は日本の変革の効果は著しく、それはとくに軍事、政治面において目覚しい、だが夫婦関係などでは依然問題があり、これは男尊女卑の風習に起因していると云う。

嘉君のこの見解は余も昨日貴族女学院の参観中に肌で感じていたところである。該学院の英語教師津田氏はアメリカ留学で英語も堪能なはち過ぎの未婚の女性だ。彼女のような女性は日本の男女間の風習には違和感を覚えるのではなかろうかと察する。

とはいえ維新以降の日本は西洋に学び強国となり、男女の道においても中華よりは遥かに勝っている！、それにも拘らずこうして遅れを指摘されるのだから恐れ入る。

客が帰ると山田、井原の両君が近く帰台する余のために宴を設けると云い出した、ダビッドソン君も誘い四人で上野郊外の「招源楼」へと向かう。

ここは正面に「不忍池」を望み、山水花木、風光明媚で、池の周辺数里に及ぶ平坦な沿道では、毎年桜が満開の季節には競馬が催されるそうだ。池の家鴨や鴛鴦が長閑な風情を感じさせる。

丁度宴も半ば、屋外で何やら奇声があがっている、尋ねたところ乞食らしい、これは今回初めての体験だ。

宴もお開きとなり時計を見ると七時だ、車で上野公園の裏通りを散策する、ここがかの「吉原遊郭」だ。七、八本の路地が縦横に交差し、二、三階建ての楼閣が軒を連ね、灯光煌煌として真昼さながらの光景だ。楼閣の一階部分は透かし柵が施され、街全体が妓楼のようだ。

楼閣内には煌びやかな軟らかい敷物が敷かれており、欄干の内側には雛妓幼婦が濃淡入り混じった化粧で十六ぐらいの娘を装い肩を寄せ合い笑みを浮かべて正座している。このような妓女は妓楼全体で数千人は居ると聞く。彼女らは光の陰で艶めかしい容姿を売り物に客を引き、客が何者かは大して気にはならないようだが、客の落としていく銭の多少は気になる様子だ。

余はこんな世相を憂い、この地で修学しようとする孫らを思い不安に駆られる、これを察したのか友人ダビッドソン曰く：

「人は愚かなものだ！昨今花街柳巷の如きは世間何処にでも存在し、欧米両州のごとき法治国

家といえども例外ではない。これには宗教活動を広めて感化を促すことが肝要だ、さもなくば己はおろか、他人を気遣うなど論外ではないか？」と。

そうは言ってもここは真つ当な役人の居る国ではないか、節度を乱す淫欲は確り取締まってもらいたいものである。今宵も遊郭は酔いどれ客が入り浸り、恰も狂った蝶が花を貪るが如しである。

更に、この界限では物乞いらが屯しており、客の袖を掴んでは錢をせびる、彼らはなぜ街なかでなく花街に出向いて物乞いをするのだろうか、これは多分世話好き者が物乞いを使って遊客を風刺しようとしているのだろう。

彼らは物乞いらを煽り遊客に錢をせびらせ、錢は売春に浪費すべからず、善行に使うべしと諭そうとしているようだ、さもなくば物乞いらに遊郭の客は情にもろく、街なかにいる者は薄情者（悪人）だなどと分別がつくはずがなからう？

ああ！日本は真に仙境なのか？物乞でない者はさて置き、物乞する者が皆聖人ならば、売春買春する者の身の置き所はどこか？余はこのことをここに記載して置こう。

夜は深まる、何とも遣り切れない気分で帰路を急ぐ。

目が覚めると三日だ。

井原君が遣って来た、早速高島公の帰京の有無を伺いに行ってもらう。朝食を済ませたところで井深先生が来られる、伊澤学務部長の見送りに行かれるそうだ。芝蘭の学生や江蘇の友人らも一緒に大阪経由で廣島から乗船する、余は友人たちへの土産物を託す。

井原君も見送りに同行するそうだ、お役人はまことに多忙である。余とダビッドソン君は暇をもてあまし本榎（榎？）にアメリカ公使を訪ねることにする。公使は不在だったが、気さくで感じの良い参事官二人と親しく挨拶を交わす。

話しによると今日は神武天皇の祭日で、例年「帝国ホテル」では演劇などが上演され盛大な祝賀会が催されるとのことだ、参加を勧められるが余は高齢を口実に遠慮したいところだが乗り気のデビットソン君に合わせることにしよう。

ホテルの門前から周囲を見渡しても演劇の幟が目にも留まるぐらいでとくに賑わいは感じられない、ただ知らせを聞いて訪れる来賓はかなりいるようだ。

正午、主催者の招待でダビッドソン君と昼食の宴会場に案内された。外国人や多数の老若男女で賑わい、ほとんどが官僚や知識層、上流階級の子弟たちのようだ。

会場のしきたりは洋式で、堂々たる佇まい、格調ある調度品など王侯貴族の邸宅を彷彿させる。

宴もお開きとなり謝礼をし会場を後にする。帰路の途中ダビッドソン君が二人の友人を訪ねるのに付き合う。一人は米国軍人、一人はワシントンの新聞記者だ、余らは恰も旧知がごとく歓談に耽り、互いにまみゆるの遅きを悔やみ、帰りすがらであることすら忘れるほどだ。

宿に戻ると横浜から細川牧師が来訪、かねてから印刷を依頼して置いた〈主津新集〉を包みの中から取出すが、初巻の十冊のみで全巻ではなく残念だ。

日も暮れ、牧師と夕食を共にし、明日芝区岩下町一丁目の芝教会での再会を約して別れる。

一夜明けて早くも四月四日。

今日は約束の大会がある、朝食後車で芝区へ向う。少々早めに到着したので広間で待つことにする。暫くすると細川瀏君と井深樞之助両牧師が到着する、彼らは広間に集まっている信者や中外の男女宣教師たちを前にして余を過分に紹介する。

ここで米国系女学校の教師委士嬢と出会う、意気投合し火曜日には先方の学校を訪問することを約束する。信者たちは一同に会し聖書を読み、賛美歌を歌い祈りを捧げ、聖餐式を執り行った。

最後に主催者から登壇し一言述べよう勧められる、他の教会でと同様に神のみ言葉を復誦し、神の教えに従い互いにいたわり、励まし合っていこうと述べる。

宿に戻る。昼食後井原君と牛込に子供たちの様子を見に行く。二日越しなので嬉しそうに飛んできた。そっと呂柄に尋ねたところ子供たちは別れた後も皆落着いて勉学に励み、悪戯もしていないと聞き安堵の胸を撫で下ろす。

暫く孫たちの相手をして寓居に戻る。松尾三代青郎が遠路はるばる来訪、余に家伝の鎧一式を贈呈、余は恐縮ながら拝受して後日台湾での再会を約束する。

夕食前、原六郎公から今月十二日午後一時に屋敷で桜花観賞会を催す旨の招待状が届く。

公はかねてより大掛かりな造園竣工の暁には盛大に落成祝賀宴を催すと言っておられた、もしやこれが余の南下の日程の妨げになるのではと案じはするも、所詮宴は余だけの為に非ず、気にする事はあるまい。

夕食後、為すことも無く早々就寝する。

五日、安息曜日。

朝食後車で牛込に向かい孫たちと徒歩で拂方町二四番地の教会へ晚餐聖節の礼拝に行く。沿道の早咲きの桜は散り始めてはいるもののその妖艶さと愛らしさにはなお魅せられる。

教会の前で帽子を取って中に入る、信者たちはいつも通り歓談を交わしている。礼拝のあと孫たちとも別れて宿に戻る。

茶商の影山秀樹君が小長井清一らを伴い四人で富士郡から遠路はるばる遣って来た、互いに話が尽きず知り会うのの遅きを惜しんだ。

余らは専ら貿易上の関心事で意気投合し、彼らは井原君に今夜芝区の料亭に余を招待したいと申入れているようだ、再三辞退するもお受けする。

客と入替わりに孫たちが遊びにやって来る。日本では日曜は授業が無いらしい、寸暇を惜み勉学に励み落伍しないようにと懇ろに戒める、皆納得してくれる。夕暮れまで遊んだあと遠い道のりに慣れない孫たちを牛込まで送らせる。

夕刻、影山君の招きに応じ井原君と車で「濱乃家」へと向う。

九時に帰宅、一晩ぐっすり眠る。

指折り数えれば既に六日だ。

早々に食事を済ませダビッドソン君と人力車で新橋へ向い、汽車に乗り換えて「聖教書院」の主席汝妮君に会いに行く。

横浜を訪ねるのはこれで三度目だ、駅では細川牧師が出迎えてくれ喜びも一入だ、三人相乗りで汝妮君の書齋を訪れ別れて此の方互いの心情を語り合う。

歓談の合間、余とダビッドソン君は横浜駐在の米国領事と茶商「斯茂洋行」を訪ねに行く、帰りに写真館に立ち寄った。

再び汝妮君の私邸に戻り嘉麟君、細川、ダビッドソン他二、三人の外国人と食事を共にする。その間汝妮君はご夫人とお坊ちゃんやお嬢さんを皆に紹介し挨拶を交わす。客が集った部屋は人が多いわりには狭く感じる、というのも汝君の住まいは昨日火災に見舞われ、辛うじてピアノ一台が焼け残ったという。ご夫人はお嬢さんに申し付けて臨時に客席を設けたそうで、数日間はこので過ごすことになるようだ、災いとは何時どこで起こるか測り知れないものだ。

暇乞いの時になると、主人は別れの挨拶の前に記帳簿を取り出し客に署名を求めた、これは宴会時に面識のない来客に直接来歴を尋ねるのを控えるという日本のしきたりによるものらしい。

帰路、余は細川君と同行してもらい再度中島君の陶磁器店に立ち寄り購入未定だった品を入手し、その足で写真店に戻り山水や人物の画集を求め一緒に汽車に乗る。

夕刻新橋に到着、細川氏と別れて人力車で宿に戻る。日もとつぷりと暮れた頃、細川君が約束していた押川方義君を同伴して再び来訪、台湾に教会学校を設立する件で談義を交わす。この件には余も強い関心があり意気投合し、知り合うことの遅きを恨む。

押川氏は議員の職に在り、かつては海外教育会社を設けるなど海外にも人員を派遣し、北は高麗に学校を設立し、また昨今台湾の帰属に伴い現地での教育事業に責務を感じておられるようである、だがこれは一朝一夕にして成し得る事業ではなく、また丁度台湾では新茶の季節が間近に迫っていることもあり、余としては残念ながら今回はこれ以上日本に留まることは難しかろう。

食事の準備ができたので客と夕食を共にする。

暫くすると井原君が明日午後二時に角田公が宴を催す旨を伝えてくれる。角田公が余がごときにかくも破格のもてなしをなさるとは？と、戸惑う。

夕食後客も帰り、夜は静かに更ける。

明けて七日。

土砂降りの雨だ。朝食を済ませ車で二本榎西町へ女性宣教師の委士嬢を訪ねに行く。

ここでは某宣教師夫妻らとも一堂に会し、握手を交わし情緒纏綿と感慨深い会話に時をすごす。話の合間、余は東遊の所感を求められ、浅学だが君子然としているのも失礼と思い、問われるがままに日本については風俗習慣純朴にして、人情に厚く盗人も居らずまさに聖地の如しと答える。

すると聞いていた主人が声高らかに笑い出して言うには：

「貴方は来日早々で無理も無いが、私どもはここでの十数年間幾度となく盗難に遭遇し、その都度警察に届け出ても埒が明かない、彼らは昼間は潜んでいるが夜になると荒しに出てくる、日清戦争が始まり兇徒らも戦に駆り出され異国の地に連行されて行ったのだろうかここにきて漸く落ち着きを取戻したところだ」と。

こうして会話も盛り上がった。今日在席の細川君も当地の牧師たちも皆委士宣教師の呼びかけで集って来たようである。

昼食を共にした後、「聖書女学塾」を案内してもらい、そこでは生徒が楽器を奏でたり、歌ったり、祈りを捧げたりして余との別れを惜しんでくれた。

暫くして余は突如角田公の招きが控えていることに気づき即座皆に別れを告げるや一足飛びに

渋谷へと向かう。途中催促に駆けつけて来た井原君と鉢合わせとなり、余は詫びながら車で先を急ぐ。

到着するや早速宴席の柏村庸君夫妻、ドイツ人女性、瀧川、ダビッドソンら諸君と挨拶を交わす。幸い角田公は大らかな様子で不機嫌なところは見られなかった。

五時頃、宴もお開きとなるが男性客は角田公と共に再び汽車で新橋に折り返し料亭「濱の家」で夜食をとる、影山秀樹、小長井清一、浅野総一郎、白石元治郎、佐藤里治等都内外に住む懇意の十三人が同席し、雰囲気も極めて和やかである。夜の更けるとともに風雨更に激しく交錯する。

宴も終り帰途に就く。今夜は早く休むとしよう。

四月八日。

光陰矢の如く、日月梭の如し。思えば東京到着当時の楊柳蕭条、残雪枝を圧す厳寒も過ぎ行き、今は梅、桃の花開き、しだれ柳は青々と、桜は咲き競い、そして旅人は懐郷の念をつのらせる。

朝食を済ませ船出の日時も定まらぬがままに荷造りを始める。正午、招きに答えダビッドソン、井原両君を誘い浅野総一郎君を訪ねる。

浅野邸には角田公、佐藤君も合流し白石元治郎君が客を取り持ち和やかな雰囲気だ。

浅野君は裸一貫から身を起こし、今や東京の大財閥としてセメント工場や炭鉱を経営し、更には大型船四艘を建造し太平洋航行の準備中と聞く。

屋敷は立派な洋風建築でその裕福さは疑う余地はなからう！氏はその実力、財力を以って積極的に事業を展開し、月末にはアメリカ大陸を航行して商務を処理し、途中ホノルル経由で臺灣に砂糖工場の件で立ち寄る予定だという、その際は余にも協力を求めるとのこと快く承諾する。

宴の後、主人の車でセメント工場へと向かう。遠方には高さ数丈もあろう圓形高炉七、八基が聳えている。工場の中を順を追って案内される、高炉の中の石灰石の層と層の間には焼成のため石炭が敷かれている。窯の四隅に灰が積り器械が桶詰め作業を行う。

これら灰の粉末は俗に「紅毛泥」または「セメント」とも云う、工場渡し価格で一樽三円、出荷時には更に諸経費が加算される。

工場の敷地面積は数十畝あり、労働者は数百人にもものぼる。工場内は煙と埃が充滿し、内部の様子は分別が付かないほど霞んでいる。工場の建屋は水路に隣接し、石積船、土やセメント運搬用の舢舨や石炭輸送船など、各種船舶が引きも切らずに行き交う様子からも生産量や市場の規模の大きいことは推測が付く。

浅野君曰く、セメント工場を立ち上げるには資本金は少なくとも三十万金は要するとのことだ。余は水返脚（汐止）に石灰石の山があるのを思い出し、そこは水の便も良く、近場で石炭も産出するので、工場建設には打って付けと思い周りの日本の諸公にセメント工場の共同経営を打診してみたが反応がないところをみると、多分開発工事や共同経営などでは思うような収益が見込めないと判断したのかもしれない。

四方見て廻ったが、まだ早かったのか主人は令婿の白石元治郎氏に申付け向島を回り紡績工場へと余らを案内させる。工場への道は水路に面し、長堤は八九里つづき、幅三丈余りで両側の桜並木は目を奪う。

興に乗じて水路でボートを競う者、着飾った男女が木陰で楽しげに肩を寄せ合う姿はまさに

「十里の春光，江に照映え，野山錦繡にして，人は蝶の群れと戯れん。」の情景である。

角田公と余らは花道を通り抜け，長い土手沿いを散策しながら紡績工場に到着する。工場の主は角田公らお偉方が同行しているとあってか頗るご満悦だ。

先ず綿花倉庫から綿繰り作業場へと案内された。機械は止むことなく回転し素綿から精綿，そして綿糸となり梱包されて工程は完了する。

巧みに作業を繰り返す機器の絶妙さは，筆墨では形容し難い。ここでは七，八歳の児童から二十歳前後の若い女子を雇用しており，その数二千五百人余りにも達し，男性の雑役労働者も五百人余りいるそうだ。

当工場一日の綿花取扱量はだまかに見積もっても三万ポンドは下らないと聞く。東京の一工場ですら男女従業員数がこの数にのぼるのだから，大阪近辺の製造業を合わせれば工場数は百数十に達し，通常に計算してみても従業員数の年間増加率は想像に難くない！かくして国民の所得は増大し，生活は向上し，托鉢物乞の昔日とは比べるべくもなからう。

まさに事業に発奮することこそが変革自強の道なのである！

日暮れ方，角田公と向島に戻る。川岸は大勢の遊客で車は動きがとれず船で対岸へ渡たる。驚いたことに渡った先が数日前の遊郭だった，思わず角田公に尋ねたところ，東京に居ながらにしてここに花街があるとは知らなかったと仰る，なんとも奇なり？

人は仕事をしていると寝食すら忘れてしまうというから，況してや花柳界などに気を配ってはおられんということだろう？

余らは近くの茶屋で暫く足を休め再び公に随いて町中へと入る。そこは楼閣相連なり，灯光燦然と輝き，厚化粧の女性らが欄干の下に膝をつき，漂うは売春一色だ。

東京にはこのような遊郭娼婦が三千人以上も居ると聞く。ここでは一昼夜にして一萬五千もの大金が動くとか。他にも規模はやや小さいがまだ三ヶ所ほどあるそうだ，甚だしく風紀を乱すものは取締まっているそうだ。

関係官署も花柳界に対しては厳しく対処し，娼婦たちが勝手に出歩くことを禁じたり，違反者には罰則を科し，衛生面に留意し定期的に検査を実施しているようだがウイルスの感染や蔓延を防ぐ上でも止む無きことである。

そろそろ帰宅の時間だ，角田公は「濱乃家」での夕食を手配した。事前に電話で申しつけて置いたのか酒席には芸者も呼ばれ行き届いたもてなしが用意されていた。

夜も更け十時を回った頃別れを惜しみながら宿に戻る。心地よい眠りに就く。

明けて四月九日。

朝食を済ませたところに角田公から日光観光はどうかと再度お誘いを頂く。日光は日本屈指の名所だが度重なる招きに心苦しくもあり，また帰台を間近に遠出は控えたいとの思いから遠慮申し上げる旨謝辞を井原君に託す。

暫くして井原君と入れ替わりに友人が遣ってきた，余は彼に南下船の出航時期を水野公に打診してくれないかと頼む，また余が日本での滞在が長引くことで周囲に迷惑を掛けるのを避けたいと願っていることも伝えて欲しいと依頼する。

友人は余の望郷の念を察し引き受けてくれる。彼が帰ると井深君が遣って来た，来意を尋ねた

ところ角田公の指示で井原君と交代するために来たという。

昼食後夜の向くがままに上野へ美術展を見に行くことにする。ダビッドソン、井原、井深両君と余らの四人は車で道中桜を愛でつつ上野を目指す。まず「美術院」を見てまわる、美術品は塑像以外は西洋に劣らず、木刻は生き生きとして見事だ。所謂花鳥山水の書画や人物画は至って平凡で味気ない。絵画という芸術は洋画との比較において写実的でないと識者を納得させるのは難しいようだ。

近来日本の画壇では画展を催して競い、中でも水墨丹青で写意を表現する手法が好まれているようだ、これも描く本人が好んでいても、万人の目に適うかどうかは画壇を悩ますところだろう。

絵画の鑑賞につづき公園内を散策する。小道や木陰には腰掛が点在し、茶屋では遊客が喉を潤したり食事をする者もいる、余らもここで一服するとした。

今日は晴天に恵まれ桜も満開で申分ない、ただ遊客らと押し合い圧し合いにはいささか疲れを覚える。

夕刻宿に戻る。食卓に着いたところに角田公の信書が届き「日光行きは遠出のようだから取止めて明朝横須賀を一遊するのはどうか？」とお声が掛かる。ここは海軍所属の重要な場所で容易く立入り出来る所ではない。角田公の特別な計らいで、暇つぶしに行くところとは違う、それに横浜にも近く日帰りも出来るようである。

余は即刻角田公宛にお受けする旨の伝言を井原君に託して床に就く。

すでに四月十日、爽やかな目覚めだ。

早々に朝食を済ませ、井原君、ダビッドソンの三人で新橋駅へと向かう、角田公と滝川、井深の両君はすでに到着していた。

井原君は他に用事があると言って引き返す。汽車は横浜を經由、車窓に映る農夫の寸暇を惜しんで堤を補強し路をならす姿に、余は景勝の地日本の今日が決して一個人の努力によるものでないことを痛感する。

通常山あいの窪地は溜池だが珍しいことにここでは水田に姿を変えている。角田公の説明によると日本は土地よりも人間のほうが多いため貧しい農夫らは農閑期には山を切り拓き山峡を肥沃な田畑に変貌させ、堰き止めた水を灌漑に活用するそうだ、見事なことではないか！

車内では話が弾み横須賀ドックに到着した時はすでに八時を回っていた。モーターボートに乗り替えて魚雷製造所へと向う、途中山を開鑿して構築した海峡を通過する、幅も深さも数丈はあろう、ここを過ぎると突如また別の港が現れる。

と、その時にわかに魚雷が波を蹴立てて向かって来た、一瞬皆の顔色が変わるが演習とのこと幸か不幸か偶発的な出来事だった。

この海峡は隣接する二つの港を山の中腹が隔てることにより構築された堅固な天険であり、潤沢な資金と労力、資材を惜しみなく投じて穿鑿された海路だ、これにより大小船舶は魚雷工場に妨げられず両港間を円滑に通過することが可能になる。

港の入り口には砲台が数基構築されており、その強固たるや旅順に勝るとも劣らぬという。対岸に渡り執事と面会する、執事は角田公の旧友とあって余らは鄭重な歓待を受ける。

引き続き展望台に案内される、そこでは再度魚雷の試射を観覧する、連射した四発全て命中し



賞賛を博した。魚雷の外殻は硬い銅か若しくは鉄製であり、四節連結し円錐形で長さ約一丈、直径約一尺余、先端の尖鋭な一節は硫酸などの火薬を搭載し、二節目には空気が充填され、三節目には精密機器類が取付けられ、後尾の四節目のスクリューが軽快に回転し注目を集める。

これらは魚雷の外観にすぎない。

砲台を下りて魚雷製造工場や周辺の要衝の地をつぶさに見学する、見るもの全てが極めて精巧であり、外国人の手を借りることなく、悉く自国民の力によるものである。

各工場の備蓄は万全で魚雷は勿論、兵事に要するもので欠かすものはないと云って良からう。旅順、威海（衛）での鹵獲品が無造作に山積されている。

執事はなおも懇切丁寧に案内を続ける。

遊覧を終えモーターボートで海峡を一回りし造船所に到着、総責任者である海軍中将男爵相浦紀道公と面会する。

余は公の格別な配慮に礼をする。丁度高驪の李竣鎔とその随員金應元、林鏞和ら三人も工場を参観し挨拶に参じており、彼らも主人側の手厚い接待を受けていた。

昼は洋食をご馳走になり、海軍軍楽隊の音楽が流れる中シャンペンや山海の珍味に舌つづみを打ち、その持成しよはかの平原の十日間にも勝るものだ。

食後伝書鳩を見に行く、これは西洋を模倣したもので営舎間の通信を目的に活用されている。

次に角田公の案内で各機械部局や造船所などを詳細に見てまわる。

ここの規模は閩江造船所の倍はあろう、ドックの多いことや四方相連接し軍艦や商船の建造及び修船にも使用されており、その大なること並ぶもの無しである。港に停泊している大小百数十隻の船舶の中には、ドックを離れて進水したばかりの船舶もあれば、修復待機中の船もある、一造船所にして域内を斯くも大量の船舶が頻繁に往来可能とは実に見事だ！加えて傘下にはまだ四ヶ所の造船所を擁すると云うのだからその雄大な海軍力は窺い知るに余りある！

造船所の堂々たる規模や優れた制度に触れてきたが機械の精巧度や高度の技術力などに至っては一言で云い尽くせるものではなかろう？

角田公によれば、一発の魚雷でも金五、六千は要するそうだ。幾棟か連ねた二階建ての倉庫には数千発にも上る魚雷が備蓄されている。その他兵器や軍糧など巨額に上ることは想像に難くない！

斯くして全国民は勇んで物資を供出し、忠君愛国の精神を以って列国を従がわせ、強隣を服従させ得るならばこれまた東亜富強の兆しといえよう。

話の途中、角田公は入江に停泊中の廢艦を指差し、これらは威海での戦利品であると説明する、これを聞き余は「諸事を善処せんと欲するもの、先ずは器を利するべし。」と説く孔子の言葉を訝しく思った、余は「器利すれども、人の聡に敵わず」と言いたい。

そうでないなら何故旅順、威海での終盤勝利は結局日本に帰したのか？これは誠実果敢な人間が居るか居らぬかの差ではないのか。清国は一体何時になったら邯鄲の夢から目覚めるのか？もはや日本との連携を強化し亞細亞大局の安定を図るべき時ではないか、西に燕雲を仰ぎ長嘆す。

各ドックの参観を終えたが、公は更に大砲製造工場も案内するつもりのようなので、時間の都合でやむなく参観を切り上げた。帰路は汽車で横浜を経由し新橋へと向う、「濱乃家」で角田公の持成しにあずかる。

寓居に戻る、時はすでに九時を回っていた。主人が余の留守中に孫達が尋ねて来たと伝えてくれる、会えないので茶菓子を頂き、皆楽しそうに帰って行ったようだ。ここに至り余の帰郷の念はひたすら募る一方である、寝付けぬままに夜は更ける。

明けて四月十一日。

朝食後、帰台する船便の日時を打診すべく水野公宛の信書を井深君に託す。直後、高島公より明朝九時に会いに行きたい、だが日時の変更には難ありとの連絡を受ける、天涯も比隣の如しというが、近隣も天涯の如しではと嘆く。明日は原六郎氏の大慶園林落成の招宴があるし、また余にとっても礼拝日に当たる、然りとて日時の変更も促成らぬ以上、唐突に変更を申し入れ不快を招くのは控えるでしょう。

昼食後、大久保君再度来訪、余は船の手配が気懸りで帰心矢の如しの心情を伝えると早速調べてくれるそうで安堵する。

夕刻、ダビッドソンが大久保君と一緒にかねてから耳にしていた向島のボートレースを見物に出かける。暫くすると柏村庸、滝川、井深の諸君らも相前後して別れを告げた。

余は隙を見計らって車を呼び、孫たちの名札やこまごました物を纏めて牛込まで様子を見に行く。五日も顔を見てないせいか孫たちは大はしゃぎだ！そうこうしていると雲行きが怪しくなり大雨襲来の兆を感じ早々に引き上げる。

夕食後は何をするともなく日記を手に淋しさは一入つもの。床に就き朦朧とした矢先グラグラッと大きな揺れに驚き目を覚ます、時は十一時を回っていた、宿の滝口氏が気付けにと酒を勧めに遣って来る、これも日本の風習だとか、再び眠りに就く。

明けて四月十二日、安息曜日。

朝食を済ませ人力車で牛込に向う、孫たちと教会に祈りを捧げに行く。礼拝の後一人宿に戻り昼食をとる。

ダビッドソン君に原六郎翁の品川宿園落成の招待に誘われる、有難いが遠出は控えたいのでお断りする。

夕方、呂炳が孫たちをつれて荷造りの手伝いに遣って来る、故郷を恋しがる様子は見られず、夜になって帰る。余の記憶では廣島から台湾行きの船舶はかなり頻繁に復航しているはずだ、早めに準備しておくに越したことはあるまい。日本の友人たちには旅人の郷愁など知る由もないし、それどころか余にはもう少し日本に留まり美しい自然に更に親しんでから一緒に戻ればいいのではと丁重に引止める節も感じられ余は思いのままを云い出し兼ねているところだ。

一夜明けて十三日。

午前中、細川牧師来訪、少々込み入った話を済ませたとろに角田公が来られた。会話が日程のことに触れると、角田公はたかが船便程度の枝葉末節のことで、余が水野公宛に書状を託したことに甚だ不快なご様子なのだ。

そこで余はこの度は貴公のご厚意でお引留めを頂いているが、これ以上遊楽に時と公金を費やしては益なしとの思い日々つり、帰台の念抑えがたく、些細なこととは承知するも気の急

くがあまり書状を託すに至った次第を申し述べる、そしてこれも偏に貴公のご厚意に対する感謝の念からであり、それ以外の何ものでもないことを有りの儘に語る。

公は聞き終わるやすっかり気をとりなおし、即座十五日午前十一時新橋から汽車で出発することに決まる、夜には「濱の家」で余のために饞別の宴を催す運びとなる。恐らく曹操の関羽への厚情も斯くの如しであろう！余はどう感謝致すべきものや？辞退もままならずお受けする。今宵の送別の宴には都の旧友らが多数集い、情緒纏綿たるや恰も陽関を出ずるが如く、芸妓の歌声恰も渭水惜別の如し。

宿に戻り床に就く。

明けて十四日。

朝食を済ませ井深君と人力車で樺山私邸へ別れのご挨拶に伺う。話は日本各地の名勝旧跡などに及ぶ、別れ際公は台湾地方行政の善後に触れられる、余は拝聴し樺山邸を後にする。

宿に戻ると大久保君が来訪、余の近々の帰郷を喜んでくれ感謝に堪えない。帰り際には明日駅で再会しようと繰り返して別れる。余は急遽荷造りや金銭の整理に取り掛かる。

夕刻、水野公が改めて別れの挨拶に来られる。親しく語り合い、貴重な助言やご指導に感謝する。この度、余は官民紳士、公私共々親交を深め懇ろなもてなしを受けた、本来ならば自ら別れの挨拶に参上すべきところだが、何分にも帰台を目前に慌しく心ならずも失礼を余儀なくしている、よって公には誠に恐縮ではあるが余の謝意を各位にお伝え頂くようお願いする。

日も暮れ水野公が帰られると孫たち一行七人が遣って来る、夕食を共にし尽きぬ話に時が流れる。帰り際、明朝は駅まで見送りに行っても良いかと尋ねるので、虚礼は不要だ勉学に勤しむべしと言ひ聞かせる。一夜熟睡する。

明けて十五日

いよいよ南下の日を迎える、同行するのは宿の滝口氏、料理人の黄木筆等計三人、それに井深君が宇品港まで世話役として加わった。

午前十一時、見送りのダビッドソン君、柏村庸先生らと共に車で宿を後にする。新橋駅には角田公、滝川少佐、それに大久保、樺山孫一郎の諸君らがすでに到着されていた、余はすっかり恐縮し順次頭を下げて礼を述べる。

暫くして、樺山公の使者が到着。余は皆と手を取り合って惜別の言葉を交わす、出発のベルの鳴るなか帽子を振り名残を惜しみつつ車中の人となる。

ここから先の道中は余と宿の滝口氏、料理人黄木筆、及び井深君計四人の旅となる。

汽車は昼夜兼行、一路南へ。

翌十六日早朝五時、京都駅に到着、人力車で麩屋町の「柵屋旅館」に向かう。荷を卸しひと風呂浴びたところに井深君の従兄荒尾精先生がわざわざお越し下さる。先生は京都の名門、地元の名士で漢学や語学に精通され著書も多く、親しみ易く温厚な人柄でまみゆるの遅きを恨む。

先生は余らが到着早々なのを察せられてか長居を控え、今夜の設宴について伝え終わると帰って行かれた。

暫くすると西村崖五郎という人物が来訪、台湾から戻って来たばかりとのことで話題は台北の事に終始した。

昼時、荒尾精君が再び遣ってきて京都の名士諸君が今夜彼らの宴に余の参加を強く求めているという、余は恐縮ながら全てお任せする。荒尾君と宿で昼食を済ませ人力車で嵐山へと向かう。京都の家屋や街並みは東京には及ばないが優雅と静寂さが漂い塵一つなく清潔そのものだ。

車が市外に出るや一面の山林、緑滴る草木は目を奪わんばかりである。

西京はこじんまりとしているが、四方を山に囲まれ、川あり谷あり古刹ありの佳景はまさに東遊の極みといってよからう！

車が嵐山の溪谷にさしかかると案内役の主人は舟を雇い絶景を満喫しようと川くだりを始める。舟は急な流れの中を暗礁をよけ、岩石を迂回しながら下る。溪谷沿いの高峰の狭間から天空をあおげば、竹林の茂みに梅や桜があい重なり天然の美を織り成している。

晩春の候、草木は緑を競い、鳥の囀りはせせらぎの音と相交わり、水と花の色相憐れむ。曲がりくねった溪流の前方は木々が光を遮り陰を落とし、谷間をよぎる風がひやりと肌をかすめる。

その時、主人が「この長い溪流を下るには二日はかかる、まだ序の口だ！」と言う。

余らはやむ無く舟を降りて車で圓山巖、智恩院、八阪神社、南禅寺や金閣寺などを見て廻る。いづこも素晴らしいが慌しさのあまり見物も大雑把なのが残念だ。

途中荒尾君の私邸に立ち寄り小休止したあと車で紳士諸君共催の送別宴会場「萬東楼」へと向かう。

到着するや今宵の主催者濱岡光哲公の出迎えを受ける、互いに挨拶を交わす。濱岡君は京都の名家、地方財界の巨頭であり、平素から政官界の重鎮として地方行政にも協力を惜しまぬ有力者だ。彼の大らかで客に手厚く、義を重んじ財を疎んずる風格はまさに孟嘗君の遺風を偲ばせる。

宴席には余と井深君二人のほかに荒尾精先生及び京都の紳士、富豪、名家十数名が集った。

宴酣、外のラッパの音とともに周辺が俄かに騒々しくなるや主催者は余に送別に集った諸君に一言礼を述べてはと勧め、すると宴席の友人らは意気軒昂こぞって余の腕を引張り屋外へと繰出した、集まった諸君は樂の鳴り響くなか両手を挙げて「李春生万歳！」と連呼するではないか。

これも日本の風俗習慣とはいえ恐縮の至りだ。余は井深君に頼んで諸君に謝意を伝え、旅先での失礼を詫びてもらう。そのとき隣の楼閣では某皇族と元大蔵大臣松方公の一行が宴を催しており、余らの賑わいに気づき外に出てきた、井深君のとっさの勧めで余は席を外して彼らと酒盃を挙げ礼を交わす。

挨拶を終えて席に戻る、芸子たちが見事な舞を披露する、その妖艶さ、立振る舞いのしなやかさは東京の芸子にも劣らぬものだ。

宴がお開きを告げるが主催者は尚も余らを祇園の町に誘い芸妓会社などの見物に繰出した。京都では年に一回、数十日間芸子たち一堂置屋に集い隊列をなし、美しい衣裳を纏い、歌や踊りの大行列を披露するのが慣例で、観衆らは銭を出し入場券を求め祭りを楽しむそうだ。この間、京都の街は灯火燦然と輝きこの上ない美しさを呈するという。

だが、余はこれ以上諸君らと享楽に耽っていたのでは、旅程の連絡の電話も受けそびれ旅に支障をきたしかねないと思い宿に戻る。時すでに十時を回っていた。

明けて四月十七日。

朝食を済ませ午前八時井深、塚本両君と人力車で松方公を訪問、公とは昨夜盃を交わしたところだ。昨今の台湾情勢や複雑な状況の善後などが話題に上る。

そのあと井深君と荒尾精君の私邸を訪れる、そこで濱岡光哲君とも出会う。

皆連れ立って水利電気局に水運機器工程の視察に出掛ける。局の責任者の詳しい説明によれば、ここの水量が豊かなわけは、琵琶湖に直接水路を穿鑿して水を引いたことに起因しているそうだ。またその地に工場を建設し機器を据付けることで費用も削減できたという。馬力が大きくタービンの精巧度も高く、全て米国製を模倣しているので巨額の投資を要したであろう、だがその結果年間数百万トンの石炭が節約出来るわけだ。更にこの送電幹線は支線で大阪まで連なり、その利益たるや言を俟たない！

次に案内された琵琶湖の洞穴では、多くの貨客船が流れに沿って琵琶湖と洞穴の間を頻繁に行き交い、人や物の流通が促され国民生活の向上に多大な益をもたらしている。

視察を終えて祇園の二軒茶屋に引き返し洋食レストラン「中村楼」で昼食をとる。食後は車で大極殿を見物に行く、ここは寺社様式で広々としており、近年民間の寄付で建立されたと聞く。

続いて五二大会場に遣って来る、ここは前出の所謂第四回国内勸業博覧会である。場内には多種多様の珍品が陳列され鑑賞や購買に供している、規模も芝園勸業博覧会場と大差は無い。

友人の話によればここでは年平均一日の來客数が約一万人に上り、一人当たりの売上高は凡そ半金、一日当たり優に五千を超える。年間合計の売上高は百八十万金にも相当するという。これまた貿易勸業の上策ではないか。

ここで感ずることは、人は万事を為すに当り、憂うは堅き信念の欠如であり、難は憂うに非ずということである。余は帰路の負担を恐れてここでの買物を諦めた。

夕方、濱岡光哲君らに別れを告げて宿に戻る。食後、人力車で駅に向う、汽車は更に南下し夜十時一行四人大阪に到着する。洋式旅館に落着くやすぐさま床に就く。

明けて十八日。

朝食後、滝川君、井深君と護衛官の中澤良吉計四人、人力車で紡績工場を訪問する。工場は向島のとは似ているが外観はやや大きいようだ。

紡績局に戻る、ここも規模では大差はないが紡織機器や設備の面ではかなり勝っているようだ。

一旦宿に戻る。昼食を済ませてから造幣工場を見に行く。工場の表門付近は大勢の男女で賑わっている、聞くところでは毎年この時季になると工場側は敷地内中庭の春爛漫の桜を庶民にも楽しませようと大門を開放するそうだ。余らも人の群れに続く、正門のあたりで分かれて室内に案内された。責任者の長谷川為治君が丁寧に説明してくれる。古い貴重な貨幣から新金貨に至るまでが国や年代に拘らず蒐集され、展示観覧に供されている。

造幣室は粗から精に至る工程を扱い、未精製の銀が銀塊に加工される過程だ。倉庫の中には米国から輸入された鉍石や日本国内で産出したものなどが廃物の如く山積されている。これらは一旦溶鉍炉で溶解され、成型工程を経て一枚の平板に鑄造され、平板を更に円塊に穿鑿し模様が切削される。一連の穿鑿工程を経て鮮やかな天然の滑らかさや光沢が生まれ無駄な洗蒸工程を省くことができるという、なかなか優れた技である！

余はこの工程を今この目で確かめることが出来た。もし読者諸君が造銀について機器の精巧さやその芸術性などあらまし理解したいと望むならば直接来て見れば一目瞭然だ。中でも感心したのは金銀授受の防備が殊更厳しくないことだ、これは防備を忽せにしているということではなく、温厚な気風の成せるところではなからうか。

これについて粵東の造幣工場の場合は当初から防備は体を成しておらず、年間の遺失は多額に達した。要するに变革とは人が変わることである、だがこれぞ唯一中華に在っては至難の極みなのである、誠に嘆かわしい限りではないか！

造幣工場の参観を終える。次は大砲製造工場に向う。

余らの参観に同行してくれている海軍少佐の滝川君は礼服を身に纏い、胸に勲章、肩に金モールといういで立ちだ、とかく世間は見慣れぬものに驚くもので彼のこの姿が行交う花見客の目を引き、振り返ること頻りだ、多分大阪では平素軍艦があまり寄港しないからだろう。

大砲工場に到着する。責任者が熱心に応対してくれる、工場の前には鉄鋼が山積され、溶鉱炉からは火柱が高く立ちのぼり、機械は騒音を鳴り響かせ、鍛冶のハンマーが火花を散らす。余らは深さ数丈、幅一丈あまりもある砲座に案内された、この砲座は六基の溶鉱炉に囲まれ、一基の溶解量が十頓、六基合わせた溶解量で砲弾一発が造られるというのだからその威力たるや相当なものである。

屋外に出ると荒地に四十余門の大砲が並び、一門の重量が三、四十頓もある巨大なもので何れも旅順や威海衛での鹵獲品だ、他の中型大砲四百門あまりも来路は同様だという。案内はまだ続くようだが時間も迫り参観を終了する。

ああ！かつて武將斯く言う、勝敗これ兵家の常なれど、おのれ必敗の窮地にありて尚も戦に挑む者居らず、と。日清の役、これひとえに明と昧二文字の争いであり、これが勝敗を逆転させ、終には斯くたる結末に至らしめたのである、嘆かわしい限りではないか！。

工場に別れを告げて宿に戻る、食後早々就眠する。

明けて十九日、安息曜日。

朝食を済ませ奈須義諭翁ほか数人連立って大阪教会へ行く。礼拝は宮川牧師が執り行う。

牧師は余に登壇して話をしよう勧める、余は喜んで今まで各教会で語ったような趣旨を述べさせてもらい、教友たちと和やかなひと時を過ごす。

宿に戻る。早朝慌しく外出したためか行き違いになった来客の名刺が卓上に散乱している、出発も間近に迫り対応するすべもないのが心残りである。

昼食後、福田常三郎ほか数人の大阪商人と面談。そのあと相継いで丹平商会社長の森平兵衛君や副社長の森小次郎君が来訪、彼らの話では桑島君が手紙で夜には饞別の席を設けて懇ろにもてなすようにと云って来てるそうだ、だが余は広島からの連絡が入り次第即刻出発できるよう待機しているので招きは辞退させていただく。こんなわけで彼らは一旦戻り余に贈呈するという剣を携えて再び引き返して来た、これには恐縮するが有難く頂戴するでしょう。

ほどなくして今度は近江商人田村正寛、永元愿藏の諸君が訪ねて来る、彼らも井深先生に三時ごろ宿の一階で催す宴に余を招きたいと申し入れている。もともと日本の巨商には江洲一族の出が多く、彼らはかねてより一族の懇親会なるものを創設すべく計画していたようだ、しかし何分

にも大所帯ゆえ諸説紛紛、ここに至りようやく実現に漕ぎつけ、三時にこの宿の一階大広間を借りて創設祝賀宴を催すことに決まったというわけだ。丁度そこは余の宿泊場所でもあることから今宵は余を招いて共に喜びを享受し、後日の良き思い出にしようとお誘いである。

まったくその通りだ、余も招きを断る遠客にはなりたくないし、ましてや余がこれまで招きに応じ兼ねていた広島行きの出発時刻が明朝七時に延期されたという通知もすでにこの時点で届いていたというのだから尚更だ、勿論このことは後で分かったことである。

三時、主催側からお呼びがかかり井深君と一階に降りた。会場には国旗が掲げられ、五光十色の灯笼が美しく煌めき、ホールの中央には花籠が所狭しと並んでいる。楽団も控え、美女達が客の接待に大わらわだ、主人は客と握手を交わし、余も礼を返す。

洋楽の演奏とともに祝賀会の幕が開く。主催者は祝辞の中で諸事の奇縁や由来などを述べ、余にも触れているようだ。祝辞が終わるや余は突然一言挨拶をと勧められ、当惑するも井深君を伴い登壇してこう述べる：

「先哲曰く：四方の海、皆同胞にして天下は一家なり、と。これは余が心に刻んでいる名言であるが、図らずもいずこも斯くの如しである。余はアモイに生まれ育ち、後に居を台湾に移す。日清戦争後は棄地の遺民となるも樺山総督並びに水野、角田諸公のご推奨により叙勲を受章し、ここに東遊の機会を得て多くの有識者諸君と親交を重ね、互いに分け隔てなく兄弟の交わりを深めることができた。

又この度は貴地を経由するにあたり、幸運にも貴会落成の慶事にめぐり合わせご招待を頂いた、これまさに先哲の名言が正しく誤りのないことの証である。今宵残念ながら旅人はなんの贈物も持ち合わせていない、願うは先哲のこの名言を祝辞とさせて頂きたい。ここに貴会の年々のご繁栄を祈念するとともに、さらには数年後台北の地で貴会の設立を共に迎えることができるならば、これまたまことに喜ばしいことではあるまいか？」と。

井深君の通訳で盛んな拍手を頂戴する。

余は宴席で暫しの時を共にし謝意を伝えて部屋に戻る。外は春の雨が連綿と続く。

思えば東遊このかた滝川君には随分とお世話になったものだ、いつまた再会できるかも分からず、一言礼を云い直に別れの言葉を伝えたい思いに駆られる。余は井深君を伴い彼を捜しに外へと出る、漸く某料亭で滝川君を見つけたものの、面目無いくことに彼の持成にあずかる。

滝川君と別れて宿に戻ったのは十時、早々床に就く。

翌朝 四月廿日。

箸を置くや即出発だ。早朝七時、船は南に進路を定め、夕刻六時には広島に到着した。一行四人は前回同様「長沼旅館」に宿を取る。今回余の服装は前回到着時とは一変してるにもかかわらず、旅館の仲居さんは鶯の如く目敏く、あたかも古巣に戻ってきた燕の如く即座に見抜いてしまったのには仰天だ！

夜、余は暫しの別れとなる井深先生を招いて一席設けることにする、当地の居酒屋は台湾駐屯の兵士らでいずこも満員だ、やむなく「長沼旅館」の一室で別れを惜しむ。

酒盃を交わしている最中、夜分だというのに大阪新聞の記者が予告なしに突如尋ねて来る、席に招き入れるや立て続けにやれ日本滞在中のご感想は、,, やれ一番気になったことは何か？など

など質問を連発させる。

余はこれらの問いには別段指摘することは無いと返すのだが、記者は一向に納得せず、ありのままを語って欲しいと諦める気配を見せない、余は仕方なく口を開き、

「大局から見ると日本は評判以上に善美な国である。日常の起居飲食、嗜好のたぐいはさて置き、こと男女関係、男女混浴などに至っては天真爛漫に過ぎる、こういうところを改めるならば変革の全き者と称されるであろう」と答え置く。

記者は頷いて聞いていた。別れ際、先程の話をそのまま記事に出来るのか？と尋ねると、彼は「何ら支障はない」と答える。

帰台後の話だが、後日この記者からは果たして余の発言通りを載せた新聞が郵送されてきた、いやはやなんととも、。。。

宿の裏手の川面上弦の月がおぼろにけむり客足も遠退く、欄干に凭れ彼方を眺めるとみなもに漁り火燃え、歌声遥かに響き、旅人は懐郷の念を搔き立てる。出航を明日に控え早々床に就くとする。

四月廿一日。

朝食後、井深君が宇品港へ船の出航時刻を調べに行く。船は来た時と同様新発田丸で出航は午後三時と言う。余は嬉しさのあまり食事もそこそこに身支度に取り掛かる。

旧友たちが宿まで見送りに駆けつけてくれる、吉田豊作君らは感慨深気に「来た時は異族で、帰る時は兄弟だ」などと呟いている。

先の来日時には船は大勢の乗客で少々窮屈で煩わしい思いをした、だがこれから南下を共にする船客は陸軍砲兵大尉伊藤亮五郎氏ただ一人だ。

四時、船は下関で石炭を積み込む。

海上至って静謐なり。四月二十六日早朝ようやく基隆に入港。朝食を済ませた頃税関長の計らいでボートが出迎えに来る。岸壁では息子の景盛、添盛と孫の延緒、親友の秋山啓之君らに迎えられる。

久々の再会と互いの健康を喜びあい揃って車で水返脚（今の汐止）、錫口（今の松山）を経て帰宅の途につく。

自宅の門をくぐった時はすでに午後だ。東遊計六十四日、水陸の旅も恙無く終えここに家族団欒を迎える、全ては神のご加護の賜物である。

余が日本の視察旅行から戻ると、友人らはこぞって日本の景観などをたずねる、その都度余は今回東京に於ける紳商、各界友人各位の行き届いた歓迎の模様を話し、万分の一でも酬いたいと思うがこれも自然の理、人情の常というものだろう、と。

また、ここで一言日本の国民生活の面について触れるならば

先ずは、男女の学校が多いこと；

次に、創意性を備えた博物院や勸業博覧会が充実していること；

また、新聞社が隆盛であること；

更には、キリスト教会と信徒が多いこと；



日本はこれら四要素を重視し積極的に推進することで、国家を繁栄と強国へと導いた。ただこの見解については次のような発言もある：

「斯様な見解には一理あるが、所詮宗教の教理そのものが虚である以上、これを国是と並論するのは如何なものか？歴代の儒者が神道に基づいて教理を説いたことが無いとは云わない、しかしこれら神道を説いた国家も相継いで滅び、宋は明へと変遷し、更には異民族により滅亡の一途をたどるを免れ得なかった、これまさに運が然らしめたことの明証ではないか」と。

余はこれ聞き思わず失笑し、こう応じる：

「そなたは国の滅亡は運が然らしめると仰るが、なぜそうなるのかを理解して居られない。国の滅亡とは真の宗教、真の神を信仰しないことに左右される。昨今、自国を滅亡から守り、安泰を祈願せぬ統治者は居るまい、だが彼らは国を治めるに当たり摸倣に終始し、真偽の鑑別を怠っているのである。神は無形であるが、無限の天地、無量の万物は全て無形の神の創造によるのである。儒者は神道の虚を以って教理を説いた、このことは仏教、道教、イスラム教各々いずれの宗教に於いても皆然りではないか？このことはひいては欧米両州の如き大国に於いてすら例外ではないのである。

では差異は何か、差異は真の神を信ぜずば国は体を成し得ず、真の神を信ずるならば他国をも治め得るといことである、斯くして偉大な神の世は永久なのである。

イエス・キリストは最高の神であり、儒教、道教、仏教、回教及び諸々の異端は邪教である。今日イエスを信仰せぬ者は恰も鉄の杖をもって打ち碎かれる土器の如く、尚も残存するものはどれほど居るといのだらうか！」と。

以上は言葉数こそ少ないが意味するところは深い。我が国においてキリストの教えを広め、以って天意に応え、国民が幸を享受し、国に永久の平和と繁栄がもたらされることを懇願する。これまさに全ての民が渴望して止まぬところであろう。

### 【訳者後記】

李春生（1838-1924）は台湾史上初の思想家であり、同時に台湾近代化に多大な貢献をした実業家である。氏は巨額の資産を基隆—新竹間の鉄道建設、淡水河の護岸堤防の建設、及び台北大稻埕新市街などの建設に投じた。又、李春生一族による1915年新高銀行（第一銀行前身）、1920年大成火災海上保険株式会社の創設は以降台湾に於ける近代銀行、保険産業の基礎を築いた。

1895年3月日清戦争の翌年、1896年2月李春生は日本の初代台湾総督樺山資紀の招きにより二ヶ月余り日本を遊歴し、台湾最初の旅行記『東遊六十四日隨筆』を執筆し、東遊を通して明治維新が社会に及ぼした影響、及び“日本”という新たな統治者の今後の台湾統治についての考査を記し、当時の台湾総督樺山資紀に対し日本の台湾統治に触れ「閣下朝廷の命の下、本島を統治するも、文明法治を以って治すること、これ春生の望む所なり<sup>2)</sup>」と明快な進言をした。

李春生はこの東遊を境に政財界から距離を置き「社会的李公は終わり、執筆の李公が始まる」（中西牛<sup>3)</sup>）との記載にあるように社会教育、救済事業、宗教哲学及び著述に専念する。彼の著書『東西哲衡』が東西哲学に精通する哲学思想書であることに鑑み日本人中西牛郎はその伝記を『泰東哲学家李公小伝』と命名し、台湾三百万人中、学識者多し、資産家多し、名望家多しと言えども、学識、富、名声の全てを兼備えた者稀なり、李春生はその一人であると直言した。1924

年10月4日李春生はその社会的功績に基づき大正天皇より従六位勲五等の叙勲を受ける。<sup>4)</sup>

李春生著『東遊六十四日隨筆』について、歴史学者国立山形大学名誉教授佐藤三郎先生は「小生が手に入れた相当数に上る東遊記の中で最も面白く、史料として価値あるものだと思って居る<sup>5)</sup>」と評価する。原書は1896年清国福州・美華書局より出版される。尚、邦訳上に不適がある場合は、「引玉之磚」と見做しお許しを乞い願うところである。

#### 註

- 1) 李明輝編『李春生的思想與時代』序言，1頁，台北正中書局，民国84年4月。
- 2) 中西牛郎著『泰東哲學家李公小傳』42頁。
- 3) 中西牛郎著『泰東哲學家李公小傳』第二章〈閱歷〉65頁。
- 4) 陳俊宏編著『李春生的思想與日本觀感』174頁。
- 5) 佐藤三郎氏の李春生の曾孫女李璿璿宛信書，2005年1月27日付。

